

総工費は2700億円 カジノホテルの最高峰

ラスベガスが現在のようになっただけでなく、押しも押されぬ世界有数の一大エンターテインメント都市に急成長を遂げるのは、1990年代初頭からはじまった超巨大テーマホテルの建設ラッシュ以降に重なっている。その先駆けとなったのが89年に完成した『ミラージュ』。この『ミラージュ』を成功に導いた人物こそステイブ・ウィン氏だ。

ウィン氏といえば、1946年、ラスベガスに初の大型カジノホテル『フリンギング』を建設し、1年前にハリウッドで映画化された話題を集めたバグジ―ことベンジャミン・シゲル氏と並んでラスベガスの2大功労者として語られることが多いが、そんな同氏の最新作となるのが昨年4月28日にオープンした『ウィン・ラスベガス』(6階建て)だ。約2700億円にのぼる巨額の総工費は、かつて同氏が手掛け、ラスベガス随一の高級ホテルと言われた『ペラージオ』(98年完成)の総工費を約1000億円も上回るもので、現存するカジノホテルとしては最高額とされている。部屋数はスイートルームおよびヴィラ(家族用ルーム)を含め全2716室。総敷地面積は約87万平方メートルで、ストリップ地区にあるカジノホテルでは唯一、ゴルフ場が隣接しているのも特長だ。ゴルフコースはゴルフ界では有名な設計士のトム・ファジオ氏とウィン氏のコラボレーションによるもので、パー70、7042ヤードの長さを誇っている。またカルティエ、シャネル、クリスチャンディオール、グراف、ルイヴィトンなど世界の有名ブランド店が軒を並べる約7000平方メートルのショッピングエリアのほか、フェラーリやマセラティなど

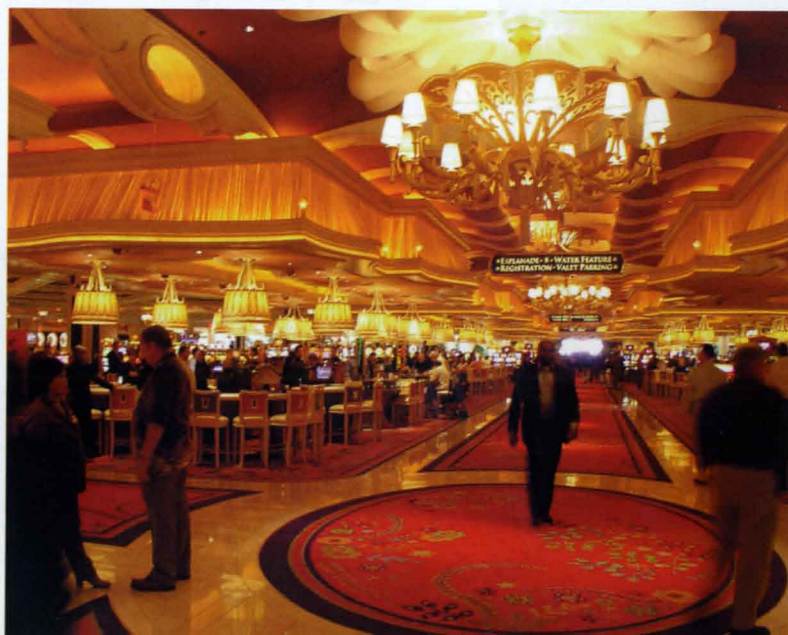
成長を続けるラスベガス発の最新サプライズ

Las Vegas Surprise

エンタテインメントの最高峰 世界最大級のカジノ・リゾート・ホテル

ラスベガスを変えた男と言われるステイブ・ウィン氏の最新作となる『ウィン・ラスベガス』で現地時間の2月1日、「ウィン・カジノ研究会」が開催された。このカジノホテルは現存するものでは世界最大級の規模を誇り、遊技機メーカーのアルゼが資本参加していることでも知られるが、今回の研究会では、カジノ・リゾートという考え方に道を開いたウィン氏の経営哲学をテーマに、館内視察が実現した。

1階のカジノは約1万平方メートルという広さを誇る。テーブルゲーム147台と約2500台のロットマシンが設置されていた。



高級車の販売店も入居、客席数が2000を超えるドーム型劇場まで完備されている。注目の1階のカジノにはテーブルゲーム147台と約2500台のロットマシンが設置され、その広さは実に約1万平方メートルにおよんでいる。

ストリップという呼び名はラスベガスの各種行政機関が集中するダウンタウンから南下したラスベガス大通り沿いにある大型カジノホテルが林立する一帯を指す通称。ストリップという単語それ自体は「帯状の土地」などと訳されるが、ラスベガス大通りを空から見下ろしたときに、まさにSTRIP状に見えることからこの呼び名が定着したものでらしい。

アルゼと共有した夢の実現 新たなウィン伝説の始まり

ウィン氏とアルゼがビジネスパートナーとしてかわりを持つようになるのは今から6年前、00年10月にウィン1ママにした、カジノとはまったく無用のアトラクションを設営、宿泊客のみならず通りを行き交う人々すべてに無料で開放するというサプライズを起こしてみせたのである。しかもホテルのレストランには一流どころを起用。客室の快適性にもこだわりをこたわり、またナイトショーには有名タレントに出演を依頼するほどの徹底ぶりだ、とにかくそれは、従来の既成概念を真っ向から打ち破るものだったが、この新概念の成功がなければおそらく90年代にみるラスベガスの大躍進もなかっただろうと言われている。現在ラスベガスで潮流をなす「カジノ・リゾート」という考え方に初めて道を開いたのがウィン氏だったのである。

その後、ウィン氏は「宝島」をテーマにした『トレジャヤーアイランド』をミラージュの隣に建設。ミラージュ同様、観覧料無料でアトラクションを開放し、また大成を収めると、98年にはついに現在でもラスベガスにあるホテルの中でも最高級に位置づけられる『ペラージオ』を完成させ、「ウィン伝説」を不動のものにしていった。

※ 「ウィン伝説」はミラージュ、トレジャヤーアイランド、ペラージオが、ライバルである『MGM』に売却された今でも少しも色褪せることなく、地元ラスベガスでは好意的に受け止められている。取材の合間、通訳を務めてくれたステイブ・ウィン・トートさんが、まるで身内の話をするような親しみを込めてこんな話をしていったのが思い出される。

「90年代のラスベガスの急成長はステイブ・ウィン抜きにはあり得なかった。このことは誰もが認めることである。現在、ラスベガス市を含むクラーク郡の人口は約180万人と言われている。



超大型テーマホテルが集中するストリップ地区のラスベガス大通り沿いにある「ウィン・ラスベガス」。総工費2700億円は現存するカジノホテルでは最高額に達する。昨年4月28日のオープン日はホテルの最高経営者であるステイブ・ウィン氏の愛妻の誕生日にあたっていた。

氏が最高経営者を務めるウィン・リゾート・リミテッド(WRL)の前身であるバルビノ・ラモール社にアルゼが出資したのが始まりだった。そしてアルゼは2年後の02年4月には追加出資を実施。そしてWRL社は同年10月に米国ナスダック市場に上場を果たしている(登録名はWYNN)。

アルゼは同年中に再度の追加出資を実施し、その出資総額は4億5250万ドル、円換算でざっと500億円に達しているが、のちにウィン氏は「同じ夢を共有できる岡田(アルゼ)会長との出会いが今回の『ウィン・ラスベガス』の完成につながった(ウィン・ラスベガスの紹介パンフレットより)」と語り、構想から完成まで約5年の歳月を岡田会長と二人三脚で歩んできたことを明らかにしている。

ところで、ウィン氏の『ミラージュ』の成功がラスベガスの歴史を変えたと言われている最大の理由は、従来のカジノホテルの常識を覆す独創的なその経営哲学にあったというのが今日までの一致した評価だ。

従来のカジノホテルの考え方は、たとえばホテルの入口には動く歩道やエ



ストリップにあるカジノホテルでは唯一、本格派の18ホールのゴルフコースが隣接している『ウィン・ラスベガス』。コースはホテルを建て直す際に、従来、東西に伸びていたものを南北に作り替え、陽射しが目に入らないように配慮されている。また豊富な地下水脈を利用し、涌も作り上げ、砂漠地帯をまったく感じさせない潤い感を演出している。



館内をめぐる回廊もご覧のとおり高級感に溢れている。90年代のラスベガスの急成長に道を開いたステイブ・ウィン氏の最新作となったこのホテルの経営にはアルゼも参加している。

スカレーターなど入りやすい導線が整備されている。出口には特設の配慮がなかったり、「料理よりもカジノ」「客室よりもカジノ」といったように、ホテル滞在中の時間の多くをカジノに振り向けさせるための「仕掛け」に知恵が絞られる傾向が強かった。要するに、すべてにカジノを優先させる経営手法が常識とされていた。

しかし『ミラージュ』でウィン氏がとった手法は、いわば従来の常識の全面否定が出発点になっていたといいたいだろう。入りやすさを最優先に考えられていた入口のある敷地に、ホテル名に冠したミラージュ(幻想)をテ

いますが、これは10年前の4倍強の規模にあたります。これもカジノ・リゾートとしてラスベガスのイメージを一新させたウインの功績によるもので、現在でも毎月5000人から8000人のアメリカ人がラスベガスに職を求めて移り住んでいると聞いています。実は私自身もハワイからの引越組ですが、雇用創出という面ではその礎を築いてくれました。とにかく既成概念にとらわれない彼のやり方は周囲をわくわくさせてくれます」。

体感した極上の世界 最高級のカジノ・リゾート

さて、『ウイン・ラスベガス』はウイン氏が現在経営する唯一のカジノ・ホテルだ。今年8月にはプロジェクト第2弾となる『ウイン・マカオ』の完成が予定されているが、ミラージュ、トレジャーアイランド、ペラージオなどの売却資金で買収したカジノホテルを、2700億円という巨費を投じて新たに建て直したのが『ウイン・ラスベガス』と理解すればいいだろう。

今回の研究会には本誌を含む業界マスコミヤ、攻略誌、それに業界のシンクタンクなど計6社が参加したが、実は今回の研究会、日本の報道関係としては初めて実現した取材という側面もあわせて持っていた。あとで聞いた話では、ウイン氏はどうやらどんなメディアに対しては減少に取材許可は出さない主義の持ち主らしいが、ビジネスパートナーとして厚い信頼を寄せるアルゼへの気持ちだが、今回のこうした破格の厚遇に現れていたのかもしれない。『客室は、とにかく細かいところまで気を配っています。ベッドのシーツには最高級の素材を使用していますし、マットレスも人間工学に基づいて背中に負担のかからないものを使っています』

訊ねてみた。「やはりメガバックスが一番人気ですね(同)」。

『メガバックス』とはラスベガスに設置されたスロットマシンをネットワークで結び、大当たり(ジャックポット)が出るまで掛け金がひたすら累積(プログレッシブ方式)されるスロットマシンのことで、一度ジャックポットを当てると何十億円という途方もないお金を手にすることができ、メガバックスのトレードマークになっているイーグル(鷹)はその夢の象徴として認識されている。

メディア初公開の特別待遇 スロットは液晶化の流れ

今回のカジノ研究会の最大の収穫とも言えたのがメディア初公開となった「スロット・リベアールーム」の視察だった。ここは文字どおり壊れてしまったスロットマシンの修理を目的とした技術系の部署だ。

ラスベガスのカジノに設置されるスロットマシンは、日本の回胴式遊技機(パチスロ)と同様、検査機関の厳しい試験をパスすることが義務づけられている。検査機関は「ネバダ・ゲーミング・コントロール・ボード」(NGCB)と呼ばれ、マシンに搭載されたIDチップをすべて登録するなど、厳格な不正防止監視にあたり、同時に、カジノ経営およびスロットマシンの製造ライセンスに関する許認可権を持つなど、強大かつ絶対的な権威に位置づけられている。

その厳正さは、たとえば『ウイン』の経営母体である「WR L」の株主としてアルゼがその適格性を厳しく審査されたことでも分かるだろう。



今回の研究会では「スロット・リベアールーム」がメディアに初公開された。この部署は壊れたスロットマシンの修理を目的に設置されるもので、ラスベガスではハード関連の故障の範囲であればカジノホテルのみならず修理できる仕組みになっている。修理に際してはどこに故障の原因があったかを解析する「テスター」と呼ばれる機器が使用されるが、リベアールームにはIGT社製(右端)とパリー社製(右)の2つのテスターが置かれていた。なおラスベガスのスロットマシン市場でもっとも高いシェア(市場占有率)を誇るのがIGT社。およそ75%のシェアを獲得している。2位以下はパリー社、ウィリアム社、アリストクラート社などが続く。アルゼもスロットマシンの製造ライセンスを取得しているが、「近く8年ぶりにアルゼ製のスロットマシンが発表されると聞いています」とホテル関係者は話していた。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ホテルのエンジニアでもどのチップがどういう機能を司っているのかまったく分からない仕組みになっています。ましてチップにはIDが付与され、すべてNGCBの管理下におかれているわけですから、不正があった場合もすぐに発覚する仕組みが構築されているわけです。だからこそうした部署が



「今ほどご案内した客室の窓から滝がご覧いただけたかと思いますが、滝はほかに1階のカジノに隣接していたり、入口の敷地などにもつくられています。これも水と緑に囲まれた外界と隔絶した世界をつくりあげるといっていいかもしれません」。

なるほど。1階のカジノからは敢えてラスベガスの街並が見えないような工夫が施されているというわけだ。砂漠の中にあつて砂漠を意識させないそんな演出がこの潤い感に結びついていたのだろう。それを支えているのが豊富な地下水脈なのだが、そういえばラスベガスが古くから「砂漠のオアシス」と呼ばれていたことをすっかり忘れていた。

話をカジノに移そう。

「今ほどご案内した客室の窓から滝がご覧いただけたかと思いますが、滝はほかに1階のカジノに隣接していたり、入口の敷地などにもつくられています。これも水と緑に囲まれた外界と隔絶した世界をつくりあげるといっていいかもしれません」。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「実はこのホテルの真下には豊富な地下水脈が流れています。水脈はさながら地下を流れる河川のような大きなもので、しかもその水脈が上下二重に流れていることから、水にはまったく不自由しない環境が整っているのです。」

先ほどご案内した客室の窓から滝がご覧いただけたかと思いますが、滝はほかに1階のカジノに隣接していたり、入口の敷地などにもつくられています。これも水と緑に囲まれた外界と隔絶した世界をつくりあげるといっていいかもしれません」。

「今ほどご案内した客室の窓から滝がご覧いただけたかと思いますが、滝はほかに1階のカジノに隣接していたり、入口の敷地などにもつくられています。これも水と緑に囲まれた外界と隔絶した世界をつくりあげるといっていいかもしれません」。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。



ハイローラー専用のスロットマシン。1回わずか数秒のゲームに\$1000(10万円超)、さらに\$5000(50万円超)が最低掛け金という超ハイローラー向きのスロットマシンも見受けられた。

「ウイン」の経営は厳密にいうとウイン・ラスベガス・エルエスシー(WL)というWRLの100%子会社が行っている。しかし許可申請にあたっては親会社はもとより、その株主も審査基準の対象とされ、『ウイン』の許可申請が行われた04年初めにはWLの親会社であるWRLの株主の適格性の承認を求めて、アルゼもNGCBに対して申請を実施している。申請後の04年8月末から9月初旬にかけてNGCBは、アルゼに関する調査を目的に調査官を日本に派遣した経緯も報告されているが、WRLの株主としてのアルゼの適格性は申請から約1年後の05年3月24日、『ウイン』の営業許可とあわせて承認されている。